

大城立裕『一号線』から「非琉球人」管理をめぐる法の条線を読み辿る

Retracing the striation of law concerning “Non-Ryukyuan” control through reading Tatsuhiko Ohshiro’s “Highway No.1”:

藤本 秀平

FUJIMOTO SHUHEI

日本学術振興会特別研究員 DC

Research Fellow (DC) of the Japan Society for the Promotion of Science

キーワード

戦後沖縄 文学 非琉球人 混血 大城立裕

Keywords

Postwar Okinawa; literature; Non-Ryukyuan; Mixed blood; Tatsuhiko Ohshiro

Quadrante, No.21 (2019), pp.87-93.

目次

1. はじめに
2. 「非琉球人」の人々の状況の違いを想像する
3. 「琉球列島」内の地位区分に絡まるジェンダー・「人種」差配の脈動を読む
4. おわりに

1. はじめに

本稿では、2018年3月29日に開催されたワークショップ「在沖奄美の人びとの歴史——『非琉球人』管理体制の視点から」（島嶼研究の新地平シリーズ）を通して、「非琉球人」管理体制の被「当事者」にされた方々の現在形の歴史の言葉から受けた衝撃と、その「歴史」を米占領史の文脈の中で位置づけつつ、批判的に問い直す研究を遂行している土井智義氏の論述とを聞知したことをもとに、1つの読み切り小説の読解を通して、「非琉球人」管理体制に生じる法の効果について考察しつつ、その法に捕縛された人々の未だ歴史の影に埋もれているかもしれない局面について想像してみたい。

まず、ワークショップの所感、というよりも、そこから得た大きな学びは、戦後沖縄の「歴史」の複数性についてである。会を通して、「復帰」以前に沖縄に生きた人々が、同じ場所にいらながらも、決

して同質的な境遇などにあつたのではなく、また、今の沖縄をめぐる国民や市民の分割線と同じでも無い、あくまで米国（軍）によって敷かれた法的地位の分割線と延線上に置かれ、動かされていたということを知った。ゆえに、そうした地位を敷く空間は、今回の報告を踏まえるなら、「沖縄」という名ではなく「琉球列島」という1945～1972年に新たに米軍によって編成された法域として積極的に言い直して行論を進める必要がある。米軍・米国の行政用語としての、当法域名とその法の効力を前提にこそ、当時の「非琉球人」という地位を捉えなければ、そう名指された人々や、それらの人々を捕捉し動かす法の動態を掴まえることは出来ないと土井氏は、今回のワークショップは勿論、研究の中で一貫して主張して来たと言える。

報告の冒頭で、土井氏は「非琉球人」として戦後管理された「在沖奄美」の人々をめぐる現在の言説状況への強い危機意識と違和を提起していたが、それは当時、常に「強制送還」の恐怖に晒され、居住地を「外国人」として生きなければならなかった人たちが、逆に特権を生きたかのようにして騙られているという「歴史」の歪曲が生じているからである¹。今、沖縄に跋扈している捩じ曲がった言説は、「日本人」や「琉球民族」といった、人々

¹ 「金口木舌」『琉球新報』2017年7月27日。当日の土井氏の発表を受けて参照した。



を均質化するカテゴリー化の視線、すなわち、常にその同質性に沿わない異質な他者を括り出す同質性の政治とでも呼びうる戦術で、予め設えた枠組みに「歴史」を押し込もうとしている。こうした同質性でのみ「歴史」を視ようとする力を裁断していくためにも、本稿では、「民族」やナショナリティの語彙を歴史に押し付けるのではなく、歴史の中で、いかにそのような同質化の政治によって、生の複数性がかき消されて来たかということについて問い直すとともに、「非琉球人」の「歴史」について考察するというよりも、当時の「歴史」をより鮮明に知るためにも、敢て、記録とは別の位相にある小説という物語形式に注目して、未だ見えていないかもしれない複数の人々の生きた「歴史」を辿り読んでみたい。

2. 「非琉球人」の人々の状況の違いを想像する

ここからは、1969年6月15日に『沖縄タイムス』に掲載された大城立裕の読み切り小説『一号線』を読み込み、テキスト内の出来事や登場人物の語りに注目しながら、「非琉球人」管理を被った人々の歴史について、記録ではなかなか見えて来ないと思われる、いくつかの具体的な局面を想像していきたい。

小説の内容は、以下の通りである。戦後、「立川基地の調達部でつとめていた敬子」は、そこに「出入りの洋服屋であった王清仁と結ばれ」、沖縄に移住してきていた。敬子は、ある日デパートで、戦後に同じく立川で生活していた友人のトシ子を見つける。立川で「黒人」兵士との間に子どもが出来ていたトシ子は、一度、帰米した後、沖縄に移動したその米兵から「混血の子」を「ひきと」という提案を受け、沖縄に来ている所であり、そこで敬子と再会していく。子どもの「手続き」が完了し、「内地へ帰」らなければならない状況になるが、トシ子は何とか沖縄に留まれないものかと思案し、その妙策として「この土地のひと」との「偽装結婚」を企てる。その企てが実行に移されたか否か判然としないままに、その相手が「交通事故で」米兵に轢殺されてしまう。事情聴取に来た「警察」にトシ子は怯え、敬子に相談をもちかける。

以上のような内容のテキストを読み込みながら、本稿では「非琉球人」という地位の鎖に縛られた

人々の具体的な状況について、「非琉球人」と一連の法的地位区分をなしている「米軍要員」／「琉球住民」も含めて、それぞれ分断があるゆえの関係性や、あるいは微妙な紐帯、更には、その身分からすり抜けるような、個々の動きと、その動きを逃すまいとする法の捕縛の力について考察していきたい。

まず、本テキストにおいて特筆すべき点は、主要人物である敬子・トシ子・王の三者が、「非琉球人」という地位にあるという点である。加えて、「非琉球人」として徴付けられた人々の日常生活とその会話とが物語を展開させているという点である。公文書や記録的・歴史的資料の中で、「非琉球人」の人たちが現れるとき、すなわち歴史的文書に、その姿が残る時というのは、「琉球列島」に入域する際の手続き時や、逆に「強制送還」の措置に晒される時、つまり、検閲対象として危険視される時が主であると言えるだろう。ゆえに、このテキストで交わされる敬子・トシ子・王たちの日常会話は、記録という側面からは、なかなか見えて来ない別の「歴史」と言っても過言では無いだろう。

いわば、「非琉球人」の生活や、「非琉球人」同士の会話が描き出されている点において、本テキストは、「非琉球人」に関わる稀有な歴史の側面を写し出していると言え得る。しかし、特筆すべきは、テキストでは日常と言っても、それは平凡な生活が描き出されているということではないという点である。むしろ、テキストが描出しているのは、「非琉球人」という法的地位を被っている者は、日常においても、常に「強制送還」を受け得るという恐怖の意識を生きているという非日常的日常である。

トシ子と久しぶりに再会した敬子は、「友」人であるトシ子が沖縄にいる目的を聞いた直後に、この場所から帰るのか否かを問う。

「で、また内地へ帰るの？」

「どうしようかと思ってる。というより、このまま居すわっちゃおうかと思ってるのよ。子どもには会いたいときに会えるし」

「でも居すわるって、できるの、そんなこと？
どういう名目で来たの？」

問題は出入管理の手続きだが、と敬子はこの“友”のために心配する。沖縄に身寄りのないトシ子としては、男からの手紙を当局にみせ、正直な目的を申告して渡航許可をもらってくるほかなかったはずである。すると、用事をすませたら、そのまま帰らなければならない。旅行者の在留期間は、いちおう一カ月で、それ以上のばすには特別な理由が必要なのだ。

トシ子が「琉球列島」に入域した（出来た）理由は、立川で関係があった「黒人」兵士に、「混血の子」を「ひきとって」もらう「手続き」を行うという理由のため、トシ子のここでの身分は、一時的在留中の「非琉球人」ということになる。その「手続き」が終わり、在留期間の「一カ月」を終えようとしている状態で、敬子に再会しているのである。

他方、「内地へ帰るの？」とトシ子に問う敬子の方は、3年前から入域し、一時的在留を経て、今は永住許可身分となっていると捉えられる。そうした状況ゆえに、敬子は友を「心配」する側、つまり自分には「心配」が無いかのように接していると言える。2人の会話は、こうした「非琉球人」内の送還可能性に関わる認識の差異が刻まれた発話の交差がなされているものとして、読み得る。

しかし、注意深く上の場面を見直すと、敬子の台詞は完全に、出入管理の法の言語が問うような言葉として、トシ子に投げかけられている。「居すわるって、できるの、そんなこと？ どのような名目で来たの？」という問いは、「友」のことを気に掛けた心情が表れた言葉としての意味以上に、入域の「手続き」だけではここに居住することが出来ないという、「琉球列島」の出入管理が設ける「入域」と「居住」の二段階の管理の実態を精確に把握し、出入管理令の検閲・登録の手順に沿うように問い糺している言葉として読みうる。

敬子は自分が受けた、入域から居住という検閲と登録の過程に今なお捕まっており、その管理された／ていることを通して、管理主体の眼を植え付けられ、自身も気づかぬうちに、ここへ入域して来た「送還可能性」の徴を帯びる者を狩り出す眼でもって、自他を視ているのである。ゆえに、すぐさまトシ子に対して、「帰るの？」という送還に関わる語彙の問いを発しているのである。

しかも、そうした送還の恐怖については、トシ子自身も、「帰るの？」という詰問を敬子から受ける以前に、既にして脳裏に刻印された状態にあったということが、そもそも小説の冒頭の台詞から示されていた。敬子にデパートで呼び止められるトシ子の緒言は、「なつかしいわ。といたいんだけど、バレちゃったかと言った方が正直ね」という表現で語られていた。自己の滞在というものが常に管理され、いつ狩り出されるかも分からない。そうした恐怖を生きていることが、トシ子のこの言葉に明確に示されている。

しかし、では、永住的な地位を約束されているかのように友の前で、余裕の様子で振舞う敬子が、トシ子を全く別の位相の人として見ているかと言うと、そうとも言えない。なぜなら、「帰るの？」という、送還に関わる質問を先に投げかけているのは敬子の方だからである。被永住許可の地位に居てなお、常に強制送還の可能性が心身に食い込んでいるために、トシ子との再会を喜ばずに、すぐさま、「出入管理」の話題に移っているのである。永住許可を受けてなお、送還の恐怖を生きているからこそ、送還を被る可能性を自分から遠ざけようと、送還可能性の危機をトシ子に転嫁していると、ここでの敬子の言葉はそう読み得る。そうした恐怖と管理意識を宿しているからこそ、トシ子が大勢の人でごった返しているデパート内で発見し得たのである。友と言うよりも、送還可能性の徴が付された人を狩り出す眼として馴致されているがゆえに、トシ子を発見し得たと言い得るかもしれない。この場面では、「強制送還」をめぐって、2人にとって共通でありつつ、また微妙に異なる被管理対象としての恐怖の差異が、再会の会話の中に刻まれているのである。

2人の会話は次に、トシ子が「旅行者の在留期間」を超えて、ここに「居すわ」るための「特別な理由」＝方法の話題へと移っていく。

「結婚することにしたの。ここで」

「はやいわね、また。どういうひととよ。この土地のひと？」

「そうよ。六十一歳」

「年寄り？」

露骨にいつてしまってから、敬子はあわてて、

「ごめんなさい。でも、あなたがあんまりあっさり言うから」

「かまわないわ。どうせほんとの結婚じゃないんだから」

「どういうこと、それ？」

「偽装結婚って知ってる？」

トシ子が見出した居住の認可を得るための妙案とは、「ここの土地のひと」と「偽装結婚」することであった。1954年に出された琉球列島米国民政府指令第6号によれば、「婚姻、養子縁組、認知その他当然民法上琉球列島の戸籍簿に記載される事件については副長官の許可を得る必要はないが、申請人の本籍地の市町村長が発給する戸籍又は除籍の謄本を琉球列島の当該市町村長に提出することによってこれを処理することができる」と記されており、「婚姻」によって転籍することで、永住許可が認められるということが示されている。そうした法の文面だけを逆手に取って、トシ子は永住の権利を得るために、男の「名義」＝籍だけを「月十ドル」で買うことを企てているのである。

法を軽やかに躲そうとするトシ子の身振りから、実際、当時の「琉球列島」をこのように生き延びた女性がいたかもしれないという可能性について、ここでは想像してみる必要があるだろう。

トシ子の身振りを讀んだとき、「琉球列島」に居住するための方法として、「結婚」という形式があったことを知るのだが、そのような、籍をめぐる関係のことを表し、規定し、又は変容させる行いに視線を移すと、本テキストが、まさに複数の「結婚」をめぐる物語であるということが認識されてくる。

本テキストは、王清仁・敬子の「結婚」、そしてトシ子の「偽装結婚」、更にトシ子と関係があった「黒人」と「黒人女性」との「結婚」という、3つの「結婚」の話で縫り合された物語であり、かつ、その結婚に勤しむ人々が、「琉球列島」へ入域して来る話である。次節では、この3つの結婚の様相を「米軍要員」／「琉球住民」／「非琉球人」という「琉球列島」で確固たる法的地位区分として区画されている制度との相関関係で読み解いていきたい。

3. 「琉球列島」内の地位区分に絡まるジェンダー・「人種」差配の脈動を読む

本節では、テキストの人物たちの結婚をめぐる展開と、結婚に伴う法的身分の変容に目を凝らし、そこから「米軍要員」／「琉球住民」／「非琉球人」という区分を、ジェンダーや性規範、更には「人種」的枠組みとの関係で読みこんでいきたい。

まず、王清仁・敬子夫婦に目を向けると、法的地位としては、2人は「非琉球人」の地位にある者同士の夫婦である。ゆえに、王・敬子はともに永住許可を得ているものの、「非琉球人」＝「外国人」である以上、常に強制送還の可能性に晒された状態にある。それゆえ、王は、米兵によって交通事故に巻き込まれても、賠償や訴追を主張しようとなしない。

次にトシ子だが、トシ子が「偽装結婚」の相手にしようとしている男は、「ここの土地のひと」である。とするならば、トシ子の「結婚」が形式上、成立した場合、転籍によって彼女の身分は一時的な滞在のみを許可されている「非琉球人」の地位から、「琉球住民」という送還可能性に常には晒されない琉球列島内の「国民」的地位に滑り込むことになる。

最後に、「黒人夫婦」であるが、この2人は「米軍要員」という、「琉球住民」や「非琉球人」という被統治者の地位ではなく、「琉球列島」を管理するグループの一員として、前の2グループとは完全に不均衡な権力関係にあるステータスを纏って入域して来ている。

「結婚」という文脈をもとに、3項の法的身分に着目しつつテキストを読むと、トシ子と敬子との関係が、ただの「友」としての関係にあるのではなく、友以前に、互いの法的地位の状況こそが、2人の関係を規定していることが、はっきりと分かってくる。敬子は、永住許可の権利を求めるトシ子を応援するという方向には向かわず、むしろ「偽装結婚」という手法において、強制送還に遭わない「琉球住民」の待遇に変身するかもしれない彼女を、複雑な胸奥を持って眼差している。

「ほんとに居すわる気？」

「かも知れない」

「なら結婚してしまいなさいよ、そのおじいさんと」

「それなのよ。ちかごろ、ほんとに結婚してくれて、言いよってきて困ってるの」

「結構じゃない。からだは健康なんでしょう、そのひと？」

「でも、結婚しそうでしない、できそうでできない、という夢をもっているうちが花じゃない？ 沖縄のひとたちが本土復帰を夢みているように」

「しかられるわよ、いい気なことって」
ほんとに、いい加減にしなさいよ、といたくなる半面、いつのまにかいろんなことから解放されているようなトシ子に感心もし、嫉妬のようなものを感じる。

「居すわる」という実感ではなく、この法域内の暮らしに少しの不満を感じてもしたら、「いやなら出ていけ、といわれるのがこわい」という胸中で、身を屈めるように生きている敬子からすれば、心の持ち方においてだけでなく、「結婚」を機に身分においても強制送還措置から「解放されているようなトシ子に感心」を抱くのは、当然の心境とさえいえる。敬子は、ここに「居」ることを脅かす法を介してしか、トシ子と自分との関係を視れないのである。

また、なぜここで敬子が「嫉妬」心にもかられているのかと言うと、強制送還に遭わない身分へと、トシ子が移行することへの「感心」の裏返しという以上に、話の中心をなしている「結婚」の在り方、すなわち、男女関係と生活との関係を踏まえた心理が働いているからである。トシ子に、形式上だけではなく、実際にも「結婚」をするよう強く促す敬子の語りに伏在している意識は、自身が、王清仁と正式に結婚しているという認識である。トシ子への「嫉妬」は、王と婚姻関係に無ければ、生活自体がほとんど成立しないような、自身の状況の不服から来た意識と言うべきだろう。

女性が経済的に 1 人で「琉球列島」を生きることの困難が、ここでは描かれているのである。女性が 1 人で生計を立てていくには、「琉球列島」の

資本のフローの根幹にある基地産業との関係の中で求められる形式において、例えばトシ子のように「アイ・シャドーなど立川で別れたときよりも派手に」するという、身体を「装飾」し「商品」化するような限定的なあり方しか、その術が社会的に無かったのではないだろうか²。語弊を恐れずに言えば、戦後「琉球列島」を生きた女性、特に「非琉球人」の地位を被った女性は、この法域と経済圏において、最初から男か兵士に依らなければ生存し得ないような、度し難い境遇に晒されていたと考えられはしないか。それゆえに、女性同士の互いを視る目は、敬子とトシ子のように、「非琉球人」の男性同士の認識よりも、より複雑なものだったことを表現する視線として捉えるべきではないだろうか。そうと仮定するなら、ここで敬子が露わにする、トシ子への「嫉妬」は、トシ子への嫌悪感や反感として読まれるべきではなく、2 人をそのように分断させる状況を設えている「琉球列島」という空間で編成された法的地位に伴われるジェンダー差配の力学への批判意識として積極的に読み込まれるべきである。テキストに形象化される 2 人の女性の語りは、「嫉妬」という情動を「非琉球人」の女性たちの間に潜り込ませている、米軍による身分とジェンダーの区分けの政治を批判的に捉える読解をこそ、要請しているのではないだろうか。

こうして、「米軍要員」／「琉球住民」／「非琉球人」という区分が生じさせる、ジェンダー差配の網目に気付くとき、同時にそこに「人種」的差配の力も絡まっていることが明らかとなってくる。ジェンダーをめぐる力動を踏まえつつ、「結婚」という契約を、性的関係の次元として捉え、再度テキストを読み返してみたい。

王・敬子夫婦、トシ子・「この土地のひと」、そして「黒人夫婦」の 3 組。この 3 組は、単に自分たちの意図だけで「結婚」しているのではなく、そうした関係性を米国民政府が承認しているからこそ、成立している関係であると言える。換言すると、3 組が性的な関係を持つことは認可されてい

² テキストにおける、「敬子は、それ以上問うまいと、だまってアイスクリームを片づけにかかった。トシ子がいまだうして暮しているのか知りたいとも思ったが、たいてい見当がつくし、深く知れば知るほど気が滅入るのかもしれない、と思った」という語りと、トシ子の外装の描写を読めば、トシ子が特設街で働いているということは、ほぼ断定出来るだろう。

て、それぞれの組合せは、「琉球列島」の性規範に抵触していないということである。

「琉球列島」における性規範という枠組みを踏まえると、テキスト内において性的関係があったにもかかわらず、それが「結婚」として成立していない組み合わせがあることに気付く。それは、トシ子と「黒人」の「兵隊」という組み合わせである。実は、この2人をめぐってこそ、テキストは物語の展開を駆動させている。というのも、トシ子が「琉球列島」に入域して来なければ、この物語は開始しないからである。物語を展開させ始め、トシ子を「琉球列島」に入域させている原動力は、「黒人」兵士とトシ子との性的関係において生まれた「混血の子」を「ひきと」するための、「黒人」兵士による呼び寄せである。ただ、「混血の子」を呼び寄せる行いは、「黒人」兵士による、自分の子どもを引き取りたいという心性の位相で読まれるべきではない。

「琉球列島」という空間では、1948年に「琉球人と米軍人・米人及びその家族並びに連合軍人との公式・非公式を問わず結婚を禁止する」という軍政特別布告（28号）が出されたことがあった。4カ月という短い期間で取り消される布告ではあったが、この法から、占領下の法域において、米国（軍）が、「米軍人・米人」や「連合軍人」と「琉球人」との結婚と性的関係を禁止する志向を有していたと捉えることは、それほど強引ではないだろう。

占領空間で禁止される性的関係の在り方という視点と実際の布告の歴史を参照した上で、テキストにおける「黒人」兵士による「混血の子」を「ひきと」という動きを読み直すと、その行為は、米軍の敷く性的規範の力動こそが稼働して行わせた行動として読み込まれてくる。トシ子という「米軍要員」と関わるべきではない非「米軍要員」として見做されている女性との、米軍所属の「黒人」兵士の性的接触の過去の痕跡を消すためにこそ、トシ子は、琉球列島へ「ひき」よせられているのである。トシ子は、能動的に「入域」しているのではなく、軍の性規範のルートから脱線しているために、既存の規範的ルールに沿うように「入域」させられているとも言えよう。これを土井氏が指摘する、「送還可能性の法的生産」という軍の管理技術の

局面から見ると、「強制送還」という措置は、ここにいる者を捕まえ、ここからいつでも強制的に弾き飛ばすという実践だけではなく、ここにいない者でさえ、それが、米軍覇権のスケール内における軍の規範の逸脱者であれば、その地位と身体を矯正すべく、向うで「送還可能性」を付与し、ここへ召喚し「ひきと」という、別の実践をもしていたものとして捉えられる。

軍は、身体の見え目に米兵との関係を常に想起させる「混血の子」をトシ子から引き離し、「黒人夫婦」の子とすることで、過去の「黒人」兵士とトシ子との性的関係の痕跡を切断しようと働きかけているのであり、軍の性的規範こそが、トシ子・「混血の子」・「黒人」兵士を操動していると、そう読める。付言すると、米軍が人々の間に設ける区分の視線には、「人種」主義的な見方が駆動していることも、ここから看取出来る。

更に、この「ひきと」りに焦点化すると、「琉球列島」内の身分の区分け上、起きるべきではない事態が起きていることに気付く。それは「混血の子」の地位が、「非琉球人」から「米軍要員」へと移行していることである。「混血の子」は、入域した時点では、トシ子の籍に所属しているので、当然、一時的滞在身分の「非琉球人」の地位である。しかし、「黒人」兵士に養子縁組を受けた後は、「米軍要員」の地位に変容させられていることになる。実際にはほとんどあり得ない跳躍と変容が起きているにも拘わらず、テキストでそのことは説明されていない。むしろ「混血の子」という表記において、その子の名前自体が空白化され、その姿と言葉が与えられていない形象化のように、その地位の変容の動態も無かったかのように語られている（いない）。しかし、まさにこうした「混血の子」を空白化しつつ、テキストの人々を動かす構成の消失点とする設定こそが、軍政における身分区分けのシステムに作動する裏のメカニズムであることをテキストは浮かび上がらせていると言える。法文化された身分の区分けの裏で、より強い区画としてその身分を縁取っている規範とは、性規範であり、「人種」規範なのである。

ゆえに、「混血の子」という表現が示す通り、1つの「人種」に分けえないものとして捉えられる対象を、換言すると、軍の望まない性規範を破った

ために名づけに有徴化を付されている対象を、無徴化し、性的関係の逸脱が無かったかのようにする動きに応じるために、それに付随するかたちで、「混血の子」の法的身分が変容していると、そのように読めるのである。そして、そうした働きかけが無かったかのように、「混血の子」は、冒頭で一語だけ明示された後、一瞬でテキストから姿を消されていくのである。

4. おわりに

本稿では、戦後「琉球列島」において米軍が敷いた「米軍要員」／「琉球住民」／「非琉球人」という3つの法的地位区分の編成に注目しつつ、特に人々の移動の管理という側面から「非琉球人」という地位を被った人々の、記録上見えて来にくい「歴史」的局面について、小説を読み込むことで、想起する試みを行ってきた。その中で、特権の有無や地位の階層化、そして「強制送還」の可能性の有無だけが、その法の網目を構成しているのではなく、そこに「人種」的規範・性的規範の政治もまた編み込まれているということについて言及してきた。

小説名である『一号線』とは、戦後に米軍が敷いた沖縄最大の道路（軍道）である。「復帰」後に、それは国道と呼び替えられ、沖縄の人々が移動する主要なルートとして現在、機能している。

『一号線』という名のテキストは、米軍という沖縄の人々の生のルートを大きく規定して来たにも拘わらず、今、沖縄の戦後史からその痕跡が辿れないように後景化していつている統治機構の占領史・政治史をこそ見逃すことの無い歴史の辿り方をこそ触発すべく、その名のままに、物語から歴史へのあわいを繋ぐ一筋の道として走り続けている。

[附記]

本稿は JSPS 科研費 16J11414 の助成を受けた研究成果の一部である。